米語と日本語における家族の談話分析
−映画における日米語対照研究−

異文化コミュニケーションゼミナール　1315025 佐宗　岬

1. 研究動機・研究目的

筆者は幼い頃から疑問に思っていた。日本人もアメリカ人も同じ人類であるのになぜこうも圧倒的な違いがあるのか。経済やテクノロジーの発展も著しく世界の中心であるアメリカと私たち日本人は何が違うのか。そこで筆者は、毎日の他愛ない家族の談話から根本的な違いがあるのではないかと考えた。本研究では言語表現や社会言語学などの分野に着目し、映画を媒体とした家族の談話シーンを比較・研究し、日本と米国の各談話の話題や類似点や相違点に焦点を当てた。本研究の目的は、家族の談話を研究することにより、互いの社会、文化、特徴を明確にするためのものとした。

2. 研究方法

本研究では、あらゆる分野で良くも悪くも「差」がある日米の家族の談話が多く取り入れられている映画を分析対象とした。これまで、会話分析、あるいは、談話分析と呼ばれる研究領域は様々なアプローチが存在し、それぞれの手法でいわゆる文法を超えたより広いレベルの研究対象にしており、会話参加者によるコミュニケーション活動がどのような性質を持ち、いかなる影響を受け、どのような効果を生み出すのかが研究されてきた。このことを踏まえ、筆者も研究を行った。

3. 主な結果と考察

分析の結果、話者と聞き手の性別とその回数は、日本語と米語で大差はなく、どちらの結果も家族の談話間で女性よりも男性の方が圧倒的に発話数が多かった。また、日米語比べても最も多く発話をしていたのが父親であり、最も多く聞き手になっていたのが息子であった。談話者の組み合わせを見ると、日本の映画では父親から息子の談話の割合が一番多く、次に多いのが母親から息子の割合であった。米国の映画では、最も多かった組み合わせは日本の映画と変わらないが、次に多かったのが息子から父親の組み合わせであった。加えて、どちらの国の映画も娘の発言回数は少なかった。話題の分類とその回数は、日本の映画で最も多かったものが家族関係のもので、次に多かったものが、身体であった。米国の映画で一番多かったものは日本と同様に家族関係で、次に多かったものは食事であった。また、日本と違い、学校と趣味の割合が多かった。言語表現内容は日米で大きな違いはなかった。

4. 結論

米語と日本語における家族の談話分析を行ったことで、米国の家族間の談話は日本の家族間の談話に比べ、息子が圧倒的に多く発話していることが明らかになった。このことにより、米国では息子が自分の意見をより多く、親に伝えていることが分かる。これほどの差違が観測されたのは、やはり文化の違いが大きいと言える。また、娘の発話数が少ないのは女性が家族間ではなく、家族外のコミュニティーで発話をしている可能性が考えらえる。また、両国の映画の父親と息子の発話回数から観察すると、日本では父

親から息子に伝えていることは多いが、その逆は少なく、父親が教育や指導をする際にも息子が父親に意見をする機会は少ないということが示された。しかし、米国では、父親から息子への発話が多く、加えて、息子から父親への発話回数も十分にあった。このことにより、父親が息子に教育、指導する際にもしっかりと息子が父親に自分の意見や考えを言う場面、文化の基盤がしっかりあることが示された。談話内の話題については、日本では家族関係、食事、身体の事が多く、３つとも家族内のことに収まっているが、米国ではそれに加えて学校や趣味という家族外のことに対しても発話が行なわれていた。日米語に観察された傾向は一概に良し悪しを付けることはできず、両言語にも長所、短所が存在する。言語内容の表現に関しても、助言や注意が多い日本に対し、米国ではその他が多いことも、米国の「自分の意見を発言する」というイメージを反映していると考えられる。日本の映画においては多くの助言や注意が多く、加えて「和」を重視することから、家族間だけでなく、社会においても同じルールに適応している。ここに文化的な差違が存在するのは明らかである。

5. 卒業論文の執筆を終えて

卒業論文が終わりに近づくにつれ、筆者は自分の家族がどうであったか考えるようになった。筆者のサッカー人生で最も影響力があった人物は、父親である。父親からサッカーの指導を多大に受けた筆者は、この卒業論文を振り返り、様々なことを考えた。父の指導は筆者に、直接的に答えを教えるというものであった。それに対して、筆者は何かを考えたり、自分の考えを父親に伝えることはなかった。当時を振り返ると、父に自分の考えを伝え、意見を擦り合せることで自分の競技力も上がったのではないかと筆者は考える。自分で考える能力やプレー中の創造性なども上達したのではないかと考える。しかし、父に非はなく、それが日本の文化でもあるし、それが間違っているとは思わない。この卒業論文により示された両国の文化の特徴を融合することで、両国の文化の欠点を補い、より価値の高い指導ができるようになると考える。筆者がこのテーマを選択したのは、それが自分の将来に役に立ち、目標を達成させるためのツールであると考えたからであり、このテーマで卒業論文を執筆して良かったと感じている。

3 年生になり、自分の将来について真剣に考えるようになった際に、一時は、就職活動を行い、幼いころからの目標を失いかけた時期もあったが、その迷いがあったからこそ、今はプロサッカー選手になるという目標が筆者の中で確信になり、それを本気で目指せるようになった。目標を達成するために必要であったのがサッカーの技術はもちろん、語学力も必須であった。そこで、異文化コミュニケーションゼミナールに所属し、英語を言語学だけでなく様々な側面から学ばせていただいた。また、ゼミナール活動では TOEFL の勉強だけでなく、英語でのプレゼンテーションに加え、スピーキングやライティングも行った。そのおかげで、高度な英語の知識を得ることができ、昨年には TOEFL Highly Developed 賞を獲得することができた。このことは、筆者がこれから海外に行き、異文化に触れあう上でとても強力な自信となった。しかし、ここまでの英語力を習得できたのは自分だけの力ではなく、須藤路子先生の熱心で素晴らしいご指導のおかげであったと考える。また、筆者の目標を全力で応戦してくれる家族や友人に感謝を表し、期待に応えられるように日々精進する。